

SPECIAL REPORT

国際酪農連盟ワールド・デーリー・サミット2022

国際酪農連盟（IDF）主催によるワールド・デーリー・サミット2022が、「栄養と生計のための酪農乳業」をテーマに9月12日から15日の4日間にわたり、インドの首都デーリーで開催された。ここでは、開会式、セッション「ワールド・デーリー・リーダーズフォーラム」及び「2022年の世界酪農乳業の見通し」の概要を紹介する。

IDFは、国際社会における酪農乳業関係者が共通の問題解決を目指し、考えや経験を交換しつつ、消費者の栄養、健康及び幸福に寄与し、良質な生乳の生産と乳製品の開発・普及に努め、科学的、技術的および経済的発展を推進することを目的とした非営利の国際団体で、年に一度、世界の酪農乳業関係者が集うサミットを開催している。

9年前（2013年10月）、横浜で開催された同サミットを記憶している方もいると思われるが、その2022年版であり、世界の酪農の状況と動向、酪農科学と酪農技術革新、社会経済と生活、栄養と健康、持続可能性と気候変動などの項目別に会議、パネルディスカッション、サイドイベント、ポスターセッションなどを実施し、約120名の講演者とパネリストによって話題が提供された。

本サミットでは、現地参加に加え、バーチャル参加（オンライン）が可能だったことから、インド国内外から1,500名以上の酪農関係者（酪農家、乳業者、各国政府及び国際機関等）が出席した（写真1）。本会も9月12日の「開会式」「ワールド・デーリー・リーダーズ・フォーラム」「2022年の世界酪農乳業の見通し」の3セッション

にバーチャル参加した。

なお、バーチャル参加者は、ウェブサイト上に配置された会場のタブを押すことで、各会場を訪れる（会場のCG映像を見ることができる）仕様となっており、デジタル先進国であるインドの一面を垣間見た（写真2）。

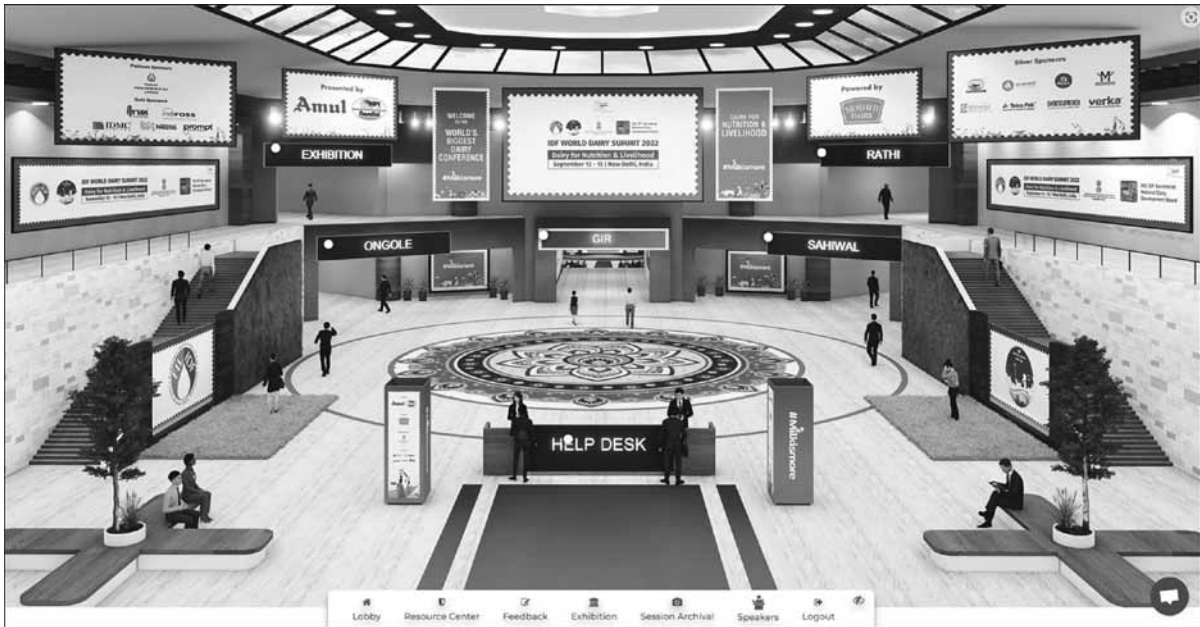
1. 開会式

サミット初日に行われた開会式には国内外から多くの参加があり、当初出席予定のなかったインドのナレンドラ・モディ（Narendra Modi）首相が来場し挨拶されるなど、関係者の驚きとともに、会場は大きな盛り上がりを見せた（写真3）。この他に、インド漁業・畜産・酪農大臣のルバラ氏、インド内務・協力大臣のシャー氏、ニュージーランド食品安全・准農業大臣のワイティリ氏、欧州委員会・農業委員のヴォイチェチョフスキ氏、米国農務省・農業・外国農業サービス担当次官代行のハフェマイスター氏、ネスレ社乳製品担当シニアバイスプレジデント兼戦略的ビジネスユニット責任者のトリベティ氏、IDF理事、インドアムール社・マネージングディレクターのソディ氏などの出席があった（バーチャル参加



（写真1）現地参加会場

出典：リチャード・ウォルトン氏（Jミルク国際委員会・IDF 特別委員）提供



(写真2) バーチャル参加会場
出典：「IDF WDS 2022」ホームページ

者含む)。

モディ首相の挨拶では、①家畜の概念と乳に関連する職業は、何千年の歴史を持つインド文化の重要な部分であること、②国内の酪農生産額は約15兆円に上り、コメと小麦の合計生産額よりも多く、かつ多数の小規模農家による生産 (production by masses) であること、③酪農部門の労働力の70%を女性が占めており、インド酪農部門の真のリーダーは女性であること、④インド政府による酪農乳業への様々な政策支援を背景に、生乳生産量は2014年の1.5億トンから直近で2.1億トンに増加するなど年率6%以上の増産を記録したことを紹介するなど、インドの酪農乳業の現状について自負をもって述べられた。

2. ワールド・デリー・リーダーズ・フォーラム

本フォーラムでは、「酪農乳業の次の25年に向けて」をテーマに、乳業会社のリーダー的立場にある以下4名による講演に続き、ブラザーレ・IDF会長を進行役にパネルディスカッションが行われた。

- ・トリベディ氏 (スイス、ネスレ社、乳業部門担当上席副社長)
- ・ネグレテ氏 (メキシコ、ランチョ・ルセロ社、取締役)
- ・チャン氏 (中国、伊利実業集団、CEO) ※ビデオ動画による講演
- ・ソディ氏 (インド、アムール社、マネージングディレクター)

講演では、各社の最近の動向や、今後25年間をどのように予測しているか、また安全で栄養価が高く持続可能な食品である乳製品で世界を養うための戦略について、それぞれの考えが述べられ、①トリベティ氏からは「乳製品は栄養の源であるだけでなく、生計の源でもあり、循環型経済全体を担っている」「インドでは千年にわたり乳牛と共存し、糞尿再生の文化が根付いている。また乳牛を家族のように考えており、これ以上の動物福祉は



(写真3) インド・モディ首相が参加した開会式
出典：IDF ホームページ「The IDF World Dairy Summit 2022 concluded with impressive results」

ない。このインドでサミットが開催されたことは、この上ない喜びだ。」、②ネグレテ氏からは「わが社では牛の健康と製品の品質を保証するため、獣医によるケアと最新の搾乳方法を用いて、快適な環境で十分な世話をしている。」、女性取締役の視点で「3人の姉妹が力を合わせて父の意志を受け継ぎ、次世代のリーダーとして会社を支え、さらに発展させていきたい。」、③チャン氏からは、「グリーン開発の追求、グリーン経営の強化、グリーン消費の促進の3つのアプローチにより、ネットゼロの実現を目指している」、④ソディ氏からは「インド国内の生乳生産量は2022年の2.1億トン (世界の23%) から2047年には6.3億トン (同45%) を見込む」とともに、「一人当たり消費量も現状の420グラムから2047年に852グラムと倍増する。さらには2047年には世界乳製品貿易の73%をインド産生乳が占める見込み」もあわせて示された。

なお、開会式の終了時刻が予定より遅くなった影響から (モディ首相の到着を待って開会式が開催され)、パネルディスカッションの時間が短縮され、十分な議論には至らなかったが、①近年の大きな課題として、あらゆ

る資材価格の上昇や流通網の混乱、②乳製品が持続可能な方法で生産された健康的な食事であることを消費者や政策決定者に認識させる手法として、「理解してもらうための教育が必要」との発言の他、ソディ氏からは「今日の‘持続可能性’という言葉は、環境活動家にハイジャックされている。持続可能性とは本来、お腹を満たすための言葉であり、酪農乳業は人間が食べられない牧草や残渣などを乳牛が食べ、牛乳に変換することで人間が食べることができるようになる、とても持続可能なシステムなのだ」という意見もあった。この他の質疑では、植物性食品への対応や中期的な酪農乳業セクターにおける新機軸及び進化の方向性等について意見が出された。

3. 2022年の世界酪農乳業の見通し

本セッションでは、①食料政策・規制に関するパネル討論（国連食糧農業機関（FAO）の代表者とニュージーランド、欧州連合、米国、インドの政府関係者が課題や自国の取組を紹介）、②世界の酪農情況（ショーム氏・フランス全国酪農経済センター）、③インドの牛乳乳製品市場（シャー氏・インド全国酪農開発委員会会長）等の講演が行われた（写真4）。

食料政策・規制に関するパネル討論では、「今日的な課題は、政策立案者や酪農乳業がどうやって環境負荷を減らすのかということだ。同時に、社会の需要も満たす必要がある。酪農乳業には、環境の負荷を減らしながら、生産量・生産効率を向上していくことが求められている（FAO）。」とし、各国政府代表者より温室効果ガス排出ゼロにむけた意思表明や状況説明等がなされた。

世界の酪農情況報告では、「2020年の世界全体での生乳生産量は前年比3%増加し、2021年は成長率2.1%と鈍化した。9億3,000万トンで過去最高を記録した、ただし増加の内訳をみると、乳用牛による生産は1.6%増で、大きな増加を示したのは水牛による（16%増）ものであり、また地域別で見た場合はアジアが増加したものの（特にインドと中国が7%増）、その他の地域は下半期以降の資材価格の高騰を受けて前年並み又は前年割れとなっている。そのため、2022年の世界の酪農乳業については、コロナ禍以降の消費者における新しい課題としてインフレに直面しているなか、資材価格は高止まっているため、

キーワードは不透明性かもしれない。」との説明があった。

続いてのインド牛乳乳製品市場報告では、「世界に占めるインドの生乳生産量は現在23%で世界最大の生乳生産国であると同時に最大の消費国」、「酪農は8千万人以上の生計を支えている」ことに加え、「今後もインドの人口と経済の継続的な成長が見込まれる」など、力強いインド社会経済を背景に明るい未来が述べられた。

4. 終わりに

サミット期間中は、今回報告した以外にも20を超える特別講演会が各会場で開催され、各テーマでより掘り下げた議論がなされたと考える。上記で報告した内容も含め、Jミルク主催による国際会議出席報告会が来年3月に開催される予定のため、詳細はそちらに譲るとして、全体を通した所感を記載する。

サミット参加前は、世界の酪農乳業のリーダーや政府代表者による、近年の世界的な持続可能な開発目標（SDGs）の関心の高まりや持続可能な食料システムの構築に向けた動きが加速するなかでの取組事例や課題、アニマルウェルフェアへの対応等の突っ込んだ議論を期待していた。しかし、初日のセッションに限ると、キーワードや考え方としての発言はあったものの、参考となる具体的な話は少なかったと感じた。来年には中国を抜いて世界最大の人口となり、かつ直近では新型コロナの影響等から40年ぶりのマイナス成長となったものの引き続き成長が見込まれるインドでの開催に加え、モディ首相の開会式へのサプライズ出席もあり、参加者が熱を持ったままのセッション突入で、どちらかという「生乳生産の伸び、需要の伸びが期待されるインドの明るい未来を会場全体で確認した」という雰囲気が強かった。来年のサミットは、米国・シカゴでの開催が予定されている。持続可能な食料システムの構築に向けた目標年度が各国で設定されて様々な取組も開始されているなか、より具体的な話題提供を期待する。

最後になるが、今回のサミット参加に関して、Jミルクによる日本語同時通訳配信を利用するとともに、現地参加されたリチャード・ウォルトン氏から写真を提供いただいた。この場を借りて関係する皆様に御礼申し上げます。



（写真4）セッション風景

出典：リチャード・ウォルトン氏（Jミルク国際委員会・IDF 特別委員）提供